

ラムサール条約指定地になった浪良瀬遊水地を訪ねて来たとなささん。このマップを片手に広い遊水地を歩いていただければ、きっと多くの出会いをすることでしょう。魚をみる人、ヨシを刈る人、写真家、熱気球家、歴史を研究家などたくさんの人たちと……。また、鳥獣害や植物たちの存在を知って、水辺が育む生命の多様性と豊かさを感じてください。また、自然の中で営まれていた半農半漁の暮らしを破壊されてしまった人々の歴史の重み等々、浪良瀬遊水地は、これからの地球環境を考える上で大切なヒントを与えてくれると思います。さあ、自分の足でヨシ原に降り立ってみてください。



どこまで続くヨシ原、一見単純な自然のように見えますが、微地形や土壌の水分条件によって多種な植物が生育しています。背の高いイネ科植物の全部がヨシというわけではありません。ヨシとオギが混生在しています。ヨシの茎の中は空洞ですが、オギの茎の中は海綿状になっています。また、ハンミョウモドキ、ワタシメズグアリモドキ、ワタモサビロモンキハナクシ、ワタラセツグンゴノなど、漢源湖造水地にちなんだ名付けられた昆虫も生息しています。鳥類は約260種（他減化費帳は44種）が確認されています。夏にはたくさんのおオキヤリやヨシヤリが繁殖しています。

んの施設がありますが、中村史郎保全ゾーンの周辺は、遊歩道も整備された。自然観察には最適です。5月には、トネリバヤシ、ノルシ、アマドコロ、エキサヤシ、ヌマヤセグサなどの植物が見られます。夏の季節には、ハンジヨウヤシとムグラが見頃になります。この頃には、オオシロコバ、コヨシバ、カモコバの盛んに咲いています。また、第1御前館の一角ではオセチカを見ることができます。秋には、ウタマオセチカとネメタカオセチカが見られます。また、史跡ゾーンの前庭の南側のヒガンジリは紅葉です。冬には、たくさんちっつち、ハイロウオウヒ、マユコバ、オオシロコバなどの冬草を見ることが出来ます。

史跡ゾーンの入りにくには、ウォッチングタワーがありますので、登ってみましょう。渡良瀬遊水地が一望できるとともに、上空を舞う鶴や

「優良資源地を保護保全・再生を目指す計画」において、自然と共生、再生を促していく観点が計りていきました。これまで、環境学フィールド1・2、3、位置変動型実験地、湿潤環境地実験地、3期より再生実験地と3つに割られています。観測地は、市や県や自治体や中心にならずに湿潤のメンテナンスが行われています。観測地には、ツウサンシロ・ソウジュなどとの絶縁度低侵性種・種子から復活してきました。

第1観測地より正赤浜へ橋を渡って第2観測地に入ってきたところの鷹見台とは、第2観測地が一望できます。鷹見台とあるように、猛禽類の観察に絶好の場所です。秋から冬は、チュウビ、ハイロチュウビ、オオウカ、ノスリ、コウゾウキツ、ツウサンシロなどを見ることが出来ます。初夏には、オオシロキリヨコギリの鳴き声もあられます。

鷹見台の対岸には、堤防があります。広い駐車場トイレもあり、自然観察の拠点として使えます。近くに富士山を望むことができ、富士山は1300mに達する高度を誇れます。環境学フィールド3が目の前にあり、池には野鳥のような天然観察ポイントの上部一帯を堤を結ぶ散策路があり、第1観測地と同様の植物を見ることが出来ます。ただし、観察路にははみ出さない観察をようしせしめます。

植物については、第1観測地と同様の植物を見ることが出来ます。ただし、道からはみ出さない観察をしよ。

谷中湖

谷中村史跡保全ゾーン地図

100

じかに、1877年（明治10）古河市箕倉が
 渡良瀬川最上流の足尾銅山を買収して経
 営に乗り出し、銅の生産量を増やして以
 来、恵みの川は死の川に転じました。とくに明治
 20年代以降、洪水とともに鉱毒の流出が
 激化して下流域一帯は農業・漁業・健康・
 環境面で壊滅的被害を受け、足尾銅山鉱
 毒事件として時代を揺るがす大きな社会問



共同基金から資金をシブシブ

